第3回

【特別対談企画】「経済も政治も国家観のある人が求められる時代」

今回の対談のお相手は、㈲志ネットワーク社 代表　上甲 晃氏。畠経営グループ（㈱）スターシップエグゼクティブバンク主催の"次代塾"が開催され、その記念講演で金沢へお越しになられた上甲 晃氏と私どもグループの代表 畠 善昭の対談です。

【日本よい国】

松下 幸之助 先生の言葉

花が散って、若葉が萌えて、目のさめるような緑の山野に、目のさめるような青空がつづいている。身軽な装いに、薫風が心地よく吹きぬけ、かわいい子供の喜びの声の彼方に、鯉のぼりがハタハタと泳いでいる。

5月である。初夏である。そして、この季節にもまた、日本の自然のよさが生き生きと脈うっている。

春があって、夏があって、秋があって、冬があって、日本はよい国である。自然だけではない。風土だけではない。長い歴史に育まれた数多くの精神的遺産がある。その上に、天与のすぐれた国民的素質。勤勉にして誠実な国民性。

日本はよい国である。こんなよい国は、世界にもあまりない。だから、この国をさらによくして、みんなが仲よく、身も心もゆたかに暮らしたい。

よいものがあっても、そのよさを知らなければ、それは無きに等しい。

もう一度この国のよさを見直してみたい。そして、日本人としての誇りを、おたがいに持ち直してみたい。考え直してみたい。

上記の文章を読まれて、素直に共感を覚える方も多いと思います。
この含蓄のある言葉は、世界のパナソニックを一代で築き上げた日本屈指の経営者で、経営の神様といわれ、晩年は松下政経塾をも立ち上げ政治家の育成にも力を注がれた松下幸之助（1894年~1989年）氏の言葉であります。その松下幸之助氏を10年間支えた、直属の部下であられた上甲 晃 氏と私どもの代表の対談がこのたび実現しましたので、その一部をご紹介いたします。

「業界を自分で変える。歴史を今日から変える。
仕事のやり方を今すぐ変える。勉強の仕方を変える。
生き方を変える。徹底的に自分を変える努力をする。」－上甲

挨拶・凡事徹底・夢・そして、志を持つ。
「当たり前のことを当たり前に継続してやり遂げる」－畠

（畠）　昨年九月十五日のリーマン破綻から半年が経過しました。時のベン・バーナンキFRB議長は当時「百年に一度の経済危機」と言っていましたが、私は一貫して「ピンチはチャンスである。今が攻め時である」と言ってきました。この言葉それ自体を松下幸之助氏は「不況もまた良し」と言う表現をなされていますが。不況時、松下氏のそばで見られてどうでしたか？

（上甲）　松下幸之助は、「かつてない困難は、かつてない改革のチャンスである」と教えました。これから始まる困難が、未曾有であるとすれば、未曾有の改革を成し遂げていけるチャンスを手にしていると。

今回の畠さんが言われたような百年に一回のピンチなら、百年に一回と言う貴重な"生まれ変わりのチャンス"を手にしたのだと。

例えば、現状とキッパリ分かれる大チャンスだ。なまじ未練があるうちは現状と決を分かつことは難しい。しかし『大難』に遭遇して本当に痛い目に遭うと、人は心から反省するものです。

◎具体的には

1、右肩上がりの経済と決別
2、大難は大好期と前向きに受け止めること
3、甘えや依存の心を克服すること
4、歯を食いしばれば、精神が鍛えられる

こんなことですが、プラス思考で考え、精神を鍛え、発想を柔軟にすることを教わりました。

（畠）　政治は経済に優先する。松下幸之助氏が塾長で、上甲さんが塾頭で松下政経塾をつくり、今（平成二十二年六月現在）国会議員二十九名、知事二名、地方議員は数えあげるときりがないくらいの議員を松下政経塾から輩出していますが、松下氏がなぜ政経塾を立ち上げたのか、私のような政治オンチには理解しにくいところがありますが、どうしてでしょうか？

（上甲）　松下政経塾の出身者だけを増やし、力を誇示しようと思えば、「塾生を選ぶ時、親が政治家である二世、三世を優先的に採用すれば、おのずと政治家の数を増やすことが出来る」しかし、政治家の数を増やすことが松下政経塾を設立した目的ではなく、政治の現状を変えることが設立の目的でした。この国をどうするのかと言う国家観がないと国民が惨めですからね。だから松下政経塾の卒業生には、今までの常識を否定し、哲学の持たれる方を育成した。結果、今では国会議員や知事にも私どもの塾卒の方が沢山輩出されています。

（畠）　政経塾の修業年限は何年でしょうか。

（上甲）　昔は五年間。今は三年間です。

（畠）　政治の現状を変えなければいけない。私も、この会報誌「報徳」に原点回帰日本経済と称し、2回述べてきました。上甲さんから見て、今の政治のどの部分が問題と思われますか？

（上甲）　政治家は昔、右手に算盤、左手に哲学を持っていました。今の政治家は、右手にも左手にも算盤を持つようになってしまった。結果として国家に運命がなくなり、国家が衰亡すれすれに。国家が衰亡しそうになると、国家を支えている経営も衰亡しそうになる。当然の帰結です。自明の理である。

　経営者はいつも経営できりぎりのコストダウンを強いられているが、政治コストも経営者は税金として払っている。その政治コストは、行政を運営するためのコストであり重要であることは事実であるが、法律である限り、高い・安いは経営者としてどうにもなりません。それを解決するには、経営者は政治に関心をもって国の運命にも関心を持たなければいけないと思う。

　経営は「あるべき姿を示しその実現にむけて努力している」日本の政治はあるべき姿も示されずに、ビジョンも目的もない。だからこの国は行き詰まってしまったと思っても良いくらい、政治は凋落した。松下幸之助はいつも嘆いていました。

（畠）　薬師寺 第百二十七代管主 高田 好胤先生は「日本は物で栄え心で滅びる」と修学旅行の学生たちに説教していました。物があふれた結果かもしれませんが、上甲さんから見られて日本人から倫理観が無くなったり道徳が無くなったのはいつ頃からでしょうか？

（上甲）　私が思うには、二つの問題提起をしたいと思います。

　その一つの、時期としては敗戦であり、もう一つは教育の内容で、アメリカ軍の進駐軍の教育の結果です。

　その教育とは、歴史教育、道徳教育、宗教教育の禁止です。それによって、日本の教育は骨抜きになってしまいました。その後の高度成長によって、物質文明の発達がそれに追い討ちをかけました。

　しかし今、嬉しいことにこの事に気づき「日本人の心が衰退した戦後教育を見直す」という気運が、少し出てきました。これは放っておくと戻ってきませんから、良いことですね。

（畠）　二十一世紀を生き抜く、これからの若い人たちへのメッセージをお聞かせ下さい。

（上甲）　今の若い人は、夢が非常に小さい。目に力が無い。目の力は、意思の強さに比例する。現状に満足しているように見える。

　視力は、志力に通じる。プロのスポーツを始めとして、どんな業界でも世界を目指そうと思えば目指せる。

　夢を持たない限りもったいないし、寂しい気がしますね。"志と夢を持ちなさい"ということです。

（畠）　確かにその通りです。

　今日、上甲さんの講演の前に1時間半、私が当塾（次代塾）の受講生に「志を持とう」ということを、三十一歳で暗殺された坂本龍馬、二十九歳で亡くなった吉田松陰の精神をレクチャーし「挨拶」「凡事徹底」「夢と志」について話し、結論として「当たり前のことを当たり前に継続してやり遂げよう」と話したばかりでした。

（上甲）　私の話も倫理・道徳の話ですから、畠さんの話とダブっていたところも沢山あると思います。

（畠）　経営者を目指す若い経営幹部の人が、生き方を変えるコツがあれば教えて頂きたいと思いますが。

（上甲）　富士山の近くに住んでいても、富士山に登る気が無い人は一生登れません。先ほど、今の若い人は志が無く、夢が小さいと申しました。

　可能性が無いわけではありませんが、環境からでも少し変えられるし、思い切って変えれば良いと思います。

　業界を自分で変える。歴史を今日から変える。仕事のやり方を今すぐ変える。勉強の仕方を変える。生き方を変える。徹底的に自分を変える努力をしないと。

（畠）　最後に、松下幸之助氏から学ばれた人使いの極意をお教え頂いて、対談をお開きにしたいと思います。

（上甲）　かねがね松下は【自分に能力がないから、人を活かして使うことができた。学歴もなく体も弱かった。】と言っていました。徹底的に相手に考えさせ、相手から答えを引き出した。そこに絶妙な人使いの極意があるようです。

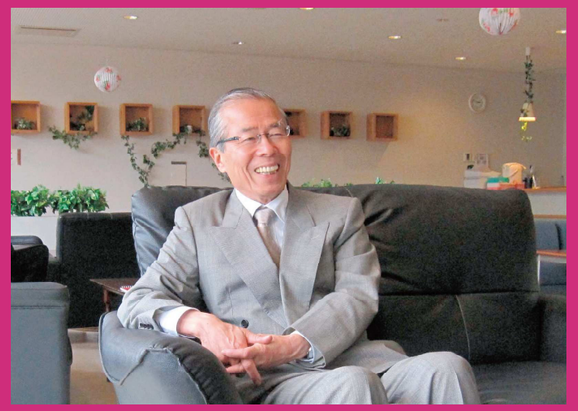
Jyoko's History

上甲 晃（じょうこう あきら）

元 松下政経塾 塾頭
㈲志ネットワーク社 代表

財団法人松下政経塾の理事、塾頭、常務理事、副塾長を歴任後、「志の高い日本」は、「志の高い日本人」によってこそ実現するとの思いに立ち、㈲志ネットワーク社を設立。多方面での活動を行う。

昭和16年大阪府生まれ。40年京都大学卒業後、松下電器産業に入社。56年松下政経塾に転任し、平成7年10月まで同塾塾頭、常務理事、副塾長を務める。8年松下電器産業を退職し、志ネットワーク運動を開始。青年塾などを展開している。著書に『志のみ持参』『続・志のみ持参』『志を教える』（いずれも致知出版社）などがある。



松下 幸之助「経営道」
不況克服の心得十カ条

【第1条】「不況またよし」と考える。
【第2条】原点に返って、志を堅持する。
【第3条】再点検して、自らの力を正しくつかむ。
【第4条】不退転の覚悟で取り組む。
【第5条】旧来の慣習、慣行、常識を打ち破る。
【第6条】時には一服して待つ。
【第7条】人材育成に力を注ぐ。
【第8条】「責任は我にあり」の自覚を。
【第9条】打てば響く組織づくりを進める。
【第10条】日頃からなすべきことをしておく。